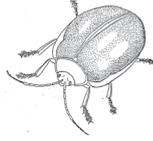


# たんぽう



## 兵庫県養父市丹戸でオオシモフリヨトウを採集

高橋輝男

2022年7月20日に養父市丹戸の鉢伏高原（標高1,050m）でライトトラップを行ったところ、23時30分頃に一頭のオオシモフリヨトウ *Polia goliath* (Fig.1) が飛来した。開張は65.0mmの♀であった。

オオシモフリヨトウは、東北アジアに特産する大型の *Polia* で、沿海州、朝鮮、日本、中国、台湾の山地に生息し、年1化で7-9月に出現する。日本では主に北海道および本州の山地に産し、四国の石鎚山系にも記録がある。

当県における本種の記録は、山本の1955年の氷ノ山と1974年の鉢伏高原での2例の採集記録のみで、それ以降には報告は見当たらなかった。

【採集記録】兵庫県養父市丹戸（鉢伏高原），20.VII.2022.1♀.



Fig.1 オオシモフリヨトウ♀（開張65.0mm）.

### ○参考文献

山本義丸, 1956. 氷ノ山の蛾類について（第二報）. 兵庫生物, 3 (3) : 121-123.

山本義丸, 1997. 兵庫県で採集した蛾の記録. きべりはむし, 25 (2) : 54-57.

(Teruo TAKAHASHI 兵庫県神崎郡福崎町)

## 神戸市西区でのヒメボタルの生息地の続報と新たな生息地

久保彬葉・久保柚葉・久保嘉靖

神戸市内におけるヒメボタルの生息は北区中心に六甲山、丹生山周辺の報告に限られており、神戸市西部においてヒメボタルの報告は見当たらなかった（八木, 2007）。しかし、著者らはホタルの自由研究中に偶然にも神戸市西区にてヒメボタルの生息地を発見し初報告をした（久保, 2023）。2024年6月、初報告場所である宝光坊川のさらに150mから200m上流においてもヒメボタルの生息を確認した。山道は、途中から倒木により奥には進めなかったが、宝光坊川流域一帯にはヒメボタルが生息している可能性がある。

また、新たに神戸市西区内でヒメボタルの生息地を発見したので報告する。2024年6月、西区押部谷町近江の近江寺周辺にてヒメボタルの生息を確認した（生息地写真1, 写真2）。オスとメスを採取した（写真3, 写真4）。

オスとメスを一緒に飼育し、産卵するか観察した。産卵場所用に、湿らせたコケを用意した。しかし、翌日にメスは死んでしまい、卵も確認出来なかった。

周辺の近江寺川周辺には、ゲンジボタル、ヘイケボタルも生息しているのも確認出来た。

前回の報告に引き続き西区内でヒメボタルの生息地2か所目を発見出来た。どちらも近くに川があり、ほとんど開発されていない場所であった。



生息地写真1.



生息地写真2.



写真3 (オス).



写真4 (メス).

まだ神戸市西部でも生息している可能性があり、報告のない明石市や三木市でもヒメボタルは生息している可能性がある。ヒメボタルのメスは後翅が退化して飛べないので、一度開発されてしまうと絶滅してしまう可能性がある。今後、新たな生息場所を見つけれられるよう調査していきたい。

○参考文献

- 八木 剛, 2007. 兵庫県におけるヒメボタルの分布. 人と自然, No.18: 163 – 172.  
 久保彬葉・久保柚葉・久保嘉靖, 2023. 神戸市西区におけるヒメボタルの初報告. きべりはむし, 46 (1): 37 – 38.

(Akiha KUBO 神戸市立井吹台中学校)  
 (Yuzuha KUBO 神戸市立井吹の丘小学校)  
 (Yoshiyasu KUBO 神戸市西区)

兵庫県西宮市におけるクロコモンタママシの記録

里見太輔

クロコモンタママシ西日本亜種 (ヤノコモンタママシ) *Poecilnota variolosa yanoi* Kurosawa, 1963 は、秋田 (2019) によって東日本亜種 subsp. *chinensis* Théry, 1926 のジュニアシノニムとされている。

本種は、国内では北海道・本州に分布し (福富ほか, 2022), 兵庫県近隣では、京都府, 鳥取県, 岡山県から記録されている (水野ほか, 1994; 那須・吉村, 1994; 鳥取県, 2022; 武田ほか, 2024)。

県内の記録は、これまでに三田市の2箇所から報告されているが (森, 1979; 高橋, 1996; 中峰, 2011), 筆者はこれまでに記録のない西宮市で本種を採集しているため報告する。なお、標本の一部は兵庫県立人と自然の博物館にて保管される。



図 西宮市産クロコモンタママシ.

【採集記録】

2♂ 2♀, 兵庫県西宮市国見台, 1. VI. 2022, 筆者採集  
 1♂ 3♀, 西宮市同所, 11. VI. 2022, 筆者採集 (図)

本種の記録について、未発表ではあるが県北部でも採集例があり (櫛原, 2023), ホストであるヤマナラシ (ヤナギ科ヤマナラシ属) は県下に広く分布しているため、今後さらなる新産地の発見が期待される。

末筆ではあるが、本種の文献情報について教えてくださった大生唯統氏 (鳥取県), 末長晴輝氏 (岡山県) に心より御礼申し上げます。

○引用文献

- 秋田勝巳, 2019. 三重県産クロコモンタママシについて. 月刊むし, (575): 28-31.  
 櫛原俊嗣, 2023. ど素人タママシ屋によるタママシ語り 日本産タママシの魅力6 クロコモンタママシとフライシャーナガタママシ. 月刊むし, (537): 58.  
 高橋寿郎, 1996. 兵庫県のタママシ (1). きべりはむし, 26(1): 13-19.  
 武田寛生・山地 治・中野一成・武田雅生・末長晴輝,